

「天皇制ファシズムと庶民意識」

静岡県立島田商業高校

一一 唐 資 朗

藤田省三が「だれも本気で天皇制を信仰していない。だれも本気で天皇制を問題にしない」①と語る庶民意識とか、羽仁五郎が「はっきりものをいえないことが、とくになにか意味のあることのようにうけとられている日本のオプスキュラントイズが日本ではいまだとくに天皇制を中心として組織されている」②とかいう庶民意識とは、いったいどのような形で形成されたのであろうか。それは村共同体の変容を概観することによって少なからず理解されるのではないだろうか。

村共同体秩序は「祭」によって機能してきた。即ち「祭」は稲作の労働生産の中から生み出されたシャーマンの要素を持ち、その再生産の中から神人合一観（神統主義）を生起させ、「祭」を行う中で村共同体の自給自足経済の慰安と平穏とを願うかたわら、努力⇨報酬観念（自給自足主義）を生成させた。そしてまた「祭」の運営上、共同体の労働再生産に不可欠の知識と経験をあわせもつ長老主義を現出させ、その「タテ」の統制関係が「家」にもち込まれて、家族主義を生み、そしてこの家族主義が「祭」の行事を通して家格家柄という観念（身分主義）を形成させた。村共同体は以上のような五つの原理③でもって機能していたと思われる。この五原理は、村共同体という閉鎖的地域を統制するために心情的統合様式、換言すれば、精神主義的要素による統合様式が支配的で、それは神人合一観や努力即報酬を伴うのだが、飽くまでも神の啓示に左右される感覚的非合理性を根幹とするものであって、長老主義もシャーマンの要素から超越するものでなく、一面合理的生活の知恵的知識と経験も「下から」の革新的要素をもちえずして、忠実に伝統を保守しようとするカリスマ的要素を孕む傾向にあった。従って家族主義も身分主義も、神人合一観を基点として運動していたから、両者は共に精神主義的側面から免れることは出来なかった。このような村共同体は時代によって推移変化を認めることが出来るが、しかしそれは共同体自身の崩壊をもたらすものではなく、貨幣経済の出現が崩壊を決定的にしたと思われる。特に近代に入って生産と消費、貨幣収支のアンバランスに立脚した貨幣経済が流布するに至って、閉鎖的共同体はその経済圏を拡大することになり、階段的分化の激成を伴って崩壊せざるを得ない状態になっていた。こういう状態を通じて、「祭」によって行われていた実質的村の機能は消滅する結果になった。しかしそれは飽くまでも表面的な機能の停止であって、庶民の心情として培った内的「祭」の機能はその相を変えて日常生活の中に残存することになった。例えば現代の労働者たちによく見かける精神主義的労働観、即ち努力（仕事に対する天職意識）が貨幣価値の問題を問わない報酬（あてがい扶持）に甘んずる意識とか、あるいは経済的闘争の中で「互いに相憐み相救うの

情」とかまさに「なんか時勢上とでもいうような一種の力を含んだものとしての観念」④に変容していた。そしてこれらの意識は逆に「故郷」を失った庶民の「故郷」である村共同体を思う憧憬心情に転化するものであった。貨幣経済は統一体としての村共同体を一気に疎外された社会に変容させて行ったといえる。その疎外された社会は、ヨーロッパの如く「開いた社会」固有の競争的進歩の理念、即ちヨーロッパの近代化社会への開幕が経済的、政治的側面、そしてまた思想的理念の面において封建的遺制への連帯的対抗という形で現れたのと異なり、村共同体が経済的拡大と精神的人格の分裂の動的不安定な開放的無定型的な社会との中から、闘争と勝利によって静的な共同体秩序に回帰したいというロマンチズムに変容していたと思われる。それは西欧の神人隔絶教の個人主義的自由、即ち自己の真理を見極めようとする自己肯定とその不安感から神への超越を果たそうという自由観が、他者との連帯感を確立して行くものと異なって、神人合一観に根ざす日本独特の自由観⑤にも見ることが出来る。即ち自己否定を通して他者との静的融合を計るというロマンチズムでもあった。このように村共同体の意識は貨幣経済を通して急速に変容して行っていた。所がその相を爆発的に変化させたのは一方では資本主義経済の、他方では天皇制ファシズムの出発点をなした明治政府の開幕にあったといえよう。

明治政府は国家の原理を「政治権力の装置 (Apparat) 乃至特殊政治の制度として構成しようとするものであり、他は国家を共同体に基礎づけられた日常的生活共同体 (Lebensgemeinschaft) そのもの乃至はそれと同一化 (Identifizierung) できるもの」⑥とし、そしてそれらを癒着し発展させようとした。このような政府の意図することは息つく暇もない近代化を果たすために、資本の本源的蓄積を強行する意味を含んでいたが、所が西欧の資本主義経済の矛盾をそのまま、持ち込むにあたって、それを隠蔽するためにあらゆる策が強行しなければならなかった。例えば伝統的一系性と家父長制の一体性を秩序原理とする「家」観念の再発掘の試み、その強化のための教育政策⑦そして特に日本特有の「自主的特権に依拠する封建的」⑧自分的中間勢力の抵抗の脆さ⑨の利用とか、その他あらゆる機関を利用して、ついに天皇制ファシズムを結晶させるに至るのである。明治政府はそういう意味で、国民の伝統的弱点（それはそれで長所たりうるのかも知れないが）を巧妙に利用しながら、政治の非政治化を試みることによって、非政治的領域を政治化⑩しようとするものであった。先きにも見たように国家に対する社会は貨幣経済の不安感に満たされ、故郷に回帰したいという心情に変化していたのだが、それが、国家権力とどのような形で融合して行くのか次に見てみよう。

(1)もう一度疎外された農村地帯を復興すること⑪が(2)祖国と命を一体化することに結合し、あるいは、(3)「故郷」は理想の相に止めて新世界を建設することによって「故郷」を再現する。この三つが不可能であるならば(4)徹底的に疎外された情民になり下がるか、という四つの道がそれぞれ庶民の心情に離散結合して現われているということである。これらの四つの意識の分裂過程がまた天皇制ファシズムへの強大化する過程でもあった。先ず第一の農村復興意識は、政府の地方分権政策と軌を一にして、村共同体に伝統的にあった多数決の原理⑫と融合して、いたずらに裏工作に走りがちとなり中央集権化の先取りムードに発展する傾向にあった。即ち社会の分極化の危機意識は世界観の分裂を促がし、経済的变化とか政治的变化としてそれを捉ええずに

たんなる社会不安としての漠然感として受けとられていたから、農村復興は「祭」を通しての整合性を融合する過程の裏工作の中に繰り込まれて「高等遊民」の暗躍の場と許す結果に陥っていた。逆にいえば政治権力における秩序感覚を共同体における秩序統合様式たる「内うち」で解決しようとする伝統が生き続けていたからこそ、暗躍の場に変貌したにちがいない。このような非政治的なものを政治化する傾向は自給自足主義、長老主義の秩序と対応する部落意識からくる「けがれ」の意識にも見られる。即ち第二の祖国と命を一体化しようとする心情と関連するのだが、神統主義と天皇制との結合政策を「けがれ」意識をもって「アカ」の「けがれ」を増強させて容易に受け入れさせ、庶民心情を「故郷」に回帰させながらも「故郷」に自然なムードの中で祖国愛という形で固定化される。これら二つは経済的疎外の中で生起していたから、優勝劣敗という「自由」観でもって「故郷」に回帰したいという心情をカバーする。この自由観は「故郷に錦を飾る」（立身出世）という形で現われる。換言すれば、第三の新世界建設（侵略移民）に連らなる。経済的には「奢侈と過検」^⑧政治的には上級価値への接近による権力の把握^⑨として現われる。このような特殊な自由観は、日本独自のものであるのか、あるいは神人合一観に由来するのか、これからの研究課題といえよう。とにかくそれは政治権力の「近代化」政策と関連する植民地支配の権力者の意識と結合するものであった。このように権力者への接近意識は自己犠牲の精神の中にもみられる。即ち大抵のそれは無条件的相の中から成立したものでなく、「祭」「家」の永遠性に対する保障の中から生まれたものであったが、このような自己犠牲の精神は、特に小市民階級、あるいは中間層^⑩に顕著なのであるが、官僚主義、巨大財閥に対する反感から、逆に自己の永続性とか、一家の安寧とかいうムード的観念化から生成したものであった。それは国家^⑪天皇に対するロマンチズム（みやび、おおらかさ）の中から生まれたものであった。^⑫所がいったん国家という巨大な枠内にその観念が戦争を通して強制されると希薄化され非合理化される。「いちかばちか」「勝てば官軍」「最悪事態」等は「正義は勝つ」という観念を、奇妙な交錯を伴って悲愴的ヤジ馬的発想に化し、ロマンチズム発想とそれとの両極を往復する微妙な心理過程を示すものであったと思われる。このような状況で、国家の滅亡の問題に直面するに至って、国家の滅亡よりも、自己のそれをいかに最小限に喰い止めるかという観念が先取りムードとか、既成事実を疑問なく認識するとかによって、「現実」は自らが創造するものとしてではなく、「作り出されてしまったこと」あるいは「どこからか起って来たもの」^⑬という形に変形する傾向を生ずるに至る。ここに重国支配者ばかりでなく庶民一般にも「無責任の体系」^⑭を現出するに至った。ここに庶民一般の情民化傾向を見ることが出来る。

簡単に庶民意識の変貌を政治権力とそれに伴う資本主義経済の側面から見たわけだが、「祭」を中心とした素朴な村共同体秩序感覚を急激に変化させたものは天皇制ファシズムを標榜する時の政治権力者であった。庶民意識が権力に悪用される要素が充分あったとしても、そのものには責任はないだろう。ただ政治的枠内に組入れられた庶民意識が、政治体制の「相対的絶対者」と化す所に問題があり、「倫理的意志の具体的命令を行いていない相対的絶対者」と化す所に天皇制ファシズムの悲劇があったと思われる。そういう意味から冒頭の藤田省三、羽仁五郎の言葉は、私達に深く考えさせるもので

あると思われる。

- 注1 「天皇制について」 現代の発見 所収 九二頁参照
- 注2 「明治維新史研究」まえがき 二頁
- 注3 神島二郎 「近代日本の精神構造」二四頁
- 注4 神島二郎 前掲書 五〇頁
- 注5 中根千枝 「タテ社会の人間関係」一六九頁
神島二郎 前掲書 四二頁以下
- 注6 藤田省三 「天皇制国家の支配原理」一〇頁
- 注7 福島正夫 「日本資本主義と「家」制度」
川島武宣 「イデオロギーとしての家族制度」をそれぞれ参照せよ。
- 注8 丸山真男 「日本の思想」四四頁
- 注9 藤田省三 前掲書 五頁
- 注10 鹿野正直 「戦後経営」 思想 十一号 一九六七年
丸山真男 「現代政治の思想と行動」四四頁
- 注11 柳田国男 「笑いの本願」 『定本柳田国男全集七』所収 七〇頁以下参照。
「祭」を通して「百日の境地」を述べているが、恐らく村共同体の全員、致は、主体を殺した情緒的なものであったと思われる。
- 注12 神島二郎 前掲書 六一頁以下
- 注13 丸山真男 「現代政治の思想と行動」二六頁以下参照
- 注14 丸山真男 前掲書 六三頁以下 七〇頁以下
- 注15 奥野健男 「天皇体験について」 現代の発見 所収 一一二頁以下
- 注16 丸山真男 前掲書 一〇九頁
- 注17 丸山真男 前掲書 「第一部」を参照
- 注18 藤田省三 前掲書 三二頁以下